「名古屋弁らしさのありか
―円頓寺界隈の生活伝承とことばの聞き取りを通して」

名古屋市立大学人間文化研究科　椎名　渉子

一．本プロジェクトのねらいと方法

二〇一九年度共同研究プロジェクト「名古屋弁で語る円頓寺説話」は、円頓寺商店街とその界隈（以下、円頓寺）における人々と暮らしの様々なエピソードを名古屋弁で語ってもらい、円頓寺説話を編むことを目的としたものである。ここで用いる「名古屋弁」とは、名古屋特有の伝統的方言表現形式をさす「狭義の方言」ではなく、その地域において自然で馴染みのある語り方全般を含む「広義の方言」と定義しておきたい。

「名古屋弁」が本プロジェクトの一つの柱となるうえで、聞き取り（収録）や文字化、構成・編集などを含めた方法論的な模索が必要となる。そこで、本年度は、説話編纂に向けて、そうした方法論的な検討を行うことを主たる活動目的として調査に取り組んだ。

語り手としてお迎えしたのは、円頓寺商店街で呉服店「きもの工藝ヲジマヤ」を営む伴野丘一（ばんのきゅういち）氏である。先代の伴野亘邦氏が『円頓寺界隈のむかし―昭和もはじめ、祭りのあとさき』（一九八三年九月二一日発行）と冠した私家版の聞き書き集を発行している。この書に収められた時代は昭和初期であるが、その視点をもとに伴野さんにお聞きすることで、生活伝承を捉えることにつながるだろう。

数年計画を前提とした初年度となる二〇一九年度は、円頓寺における言語生活・言語事象に焦点を当て、ことばを通してみえる円頓寺の生活について捉えることをめざした。伴野さんの子ども時代に円頓寺商店街で過ごしたエピソード、名古屋のことば、商売のことば、といった切り口で語ってもらった。その際、言語を研究対象とするゼミの学生を中心に、聞き取り活動を行った。

二．二〇一九年度の活動内容

［調査］

語り手：伴野丘一氏（「円頓寺門前きもの工藝ヲジマヤ」株式会社尾島屋代表取締役社長）

二〇一九年六月六日　ご挨拶

二〇一九年七月二五日

第一回　聞き取り調査

・円頓寺での子ども時代のエピソード

・日常言葉としての名古屋弁

二〇一九年一〇月一〇日

第二回　聞き取り調査

・名古屋弁の特徴―名古屋方言話者との対話を通して

（聞き手：曽我幸代先生）

二〇二〇年二月二〇日

第三回　聞き取り調査

（参加者：阪井芳貴・土屋有里子・曽我幸代・椎名渉子（本プロジェクト研究員）、赤羽望・安藤礼恵・奥村梨紗・井岡梨緒・稲森安美・梅村純気・杉江京香・谷口哲進（本学学部生）、鈴木富雄（本学人間文化研究科研究員））

三．ことばの面から円頓寺を捉える意味

円頓寺商店街（愛知県名古屋市西区那古野）は、圓頓寺の門前町として一八世紀中ごろから発展した。清州越しによって名古屋城下の碁盤割地域に移ってきた武家・町人の暮らしと、堀川を挟んで共に歩んできた地である。また、近年の円頓寺界隈は、近隣地域だけでなく潜在的な外国人観光客の需要を掴み域外誘客を推進することに活発に取り組んでいる地域である。このような近年の取り組みについては、本学人間文化研究所（共催：都市政策研究センター）が二〇一八年度に開催した講演会「名古屋円頓寺商店街の奇跡」（講演者：同名の書籍執筆者である山口あゆみ氏、コメンテーター：本学人間文化研究科の林浩一郎先生）において、円頓寺が商店街の

復興モデルとされるに至るまでの復活の経緯が取り上げられたところである。そうした新たな取り組みが注目される点と、歴史ある商店街として受け継がれてきた人々の生活とが織り混ざる独自の地域性を有するが、すべての時代に共通するのは、商店街という性格上、人々やことばの往来が盛んであったという点であろう。当該地域特有の言語生活の一端を本プロジェクトの取り組みによって少しでも描き出すことを試みたい。

そこで、地域の特有性について、方言学的な視点から名古屋と円頓寺という二つの地点を捉えたい。近畿圏を中心としたいわゆる関西弁の世界では、ものの言い方の婉曲性（悪く言えば、回りくどさ）が指摘されることがある。関西弁と対照されることの多い東京弁では、婉曲的な関西の言い回しに対して直接的であけすけといった話し方の特徴が示されることも多い（加藤ほか一九六八）。

方言学の分野においても、どのような場面でどのように伝えるかという語用論・方言表現論的視点から地域差のありかを探る研究もみられる。たとえば、東京弁と関西弁の対立は、話し方レベル（話題の組み立てやそこに使用される表現形式）において、東西差が見出されている。また、小林（二〇一七）では谷崎潤一郎の作品を通して、そのような東京と関西の言語行動やものの言い方に対する記述を比較している。そうしたことを踏まえると、愛知のなかでもとりわけ文化的中心地である名古屋の言語行動のありかたは、地理的にみて関東と近畿の中間であるという点で興味深い。

また、名古屋弁に目を向けると、武家ことば、上町ことば、下町ことばの三つの分類（芥子川一九七一、二八頁）に示されるように階層性が顕著だった時代の言語生活が、どのように継承・消滅したのかという点と、円頓寺における言語行動がそうした階層性とどのように関連するのかというところに関心がある。たとえば、高年層女性の言い方を例にとると、「～をください」といった敬語形式には、かつては「チョーダィアスバセ」（上町）に対して「チョーダィ／チョー」（下町）という変異がみられた。このように、改まりの場における上位者・対等者・下位者・婦女子に対して使用する表現形式は階層別に厳密に異なっていた時代があったが、武家ことばは上町の町家のことばや庶民のことばと融合してしだいに姿を消し、現在の名古屋弁にはそうした表現形式の階層性は見られない。上町ことばも消滅の一途をたどり、現在の名古屋弁は下町ことばが基盤となっていることはよく指摘されるところである。

ここでいう上町とは広小路通り以北の碁盤割地域を指す（芥子川一九八三、二三七頁）。伴野さんは、円頓寺界隈のことばと、堀川にかかる五条橋を渡った先の碁盤割地域である丸の内地区との「ことばの境界」を子ども時代から認識しており、自分たちは丸の内地区と比較するとざっくばらんな物言いをするという言語意識をお持ちだ。一方で、五条橋を介した両エリアの交流は、円頓寺にさまざまな表現形式・言語行動の様式を生じさせた可能性もある。ざっくばらんといえど、円頓寺は材木商のいた江戸時代から現在は商店街となり、人の行き交う地である。さまざまなことばの階層をつなぐこの地で商売を営む伴野さんを通して、円頓寺だからこその言語生活が見えてくるはずだ。

四．「綺麗になりますなも」―「なも」がなくても名古屋弁？

第一回目の聞き取り調査では、円頓寺での幼少期のエピソードや、名古屋弁での日常のやりとりについてお聞きした。［　］内は、伴野さんの表現をそのまま引用している（次章以降も同様）。

現在は、商売の場面において［バリバリの名古屋弁］が聞かれるかというとそういうわけではないと伴野さんは語る。商店街の会議等においても名古屋弁の出現頻度は低いという。しかし、昔の商店街の会議では［何言ってるかわかんないくらい］訛っていたそうだ。このように商売では名古屋弁をあまり使わなかったそうだが、日常の朝などは名古屋弁がとびかっていたという。

この、［バリバリの名古屋弁］に含まれる、伝統的方言形式として有名な終助詞「なも」「えも」は上町の女性が使うことばとして位置付けられることが多いが（芥子川一九七一、三七頁）、上町に限らず多くの高年層女性が使っていた。たとえば、朝、店先を掃除している伴野さんに向けて近所の人から「綺麗になりますなも」と、よくことばをかけてもらっていたという話しをお聞きした。この「綺麗になりますなも」という表現は、とにかく上品で控えめな言い方に

聞こえる。「なも」は上向きの待遇的意味（丁寧さ）を有する終助詞であるためそのように聞こえるのは当然であるが、「なも」を取り除いても丁寧で上品な言い方に聞こえてくる。それはなぜだろう。そこに名古屋弁らしさのありかに関わるのではないか。

東京出身の筆者の言語感覚だと、こうした場面で近所の高年層女性に言われる言い方として思い浮かぶのは「（掃除して）えらいね（えらいですね）」「よくやってるね」といった褒めることばである。そもそも、褒めるという言語行動は、褒める・褒められるという聞き手・話し手の序列を顕在化する。また、褒められるべき行動をした主体をフォーカスするという点で、非常に直接的な言語行動であるとも言えるのではないか。しかし、円頓寺で聞かれた「綺麗になりますなも」は、「（場所が）綺麗になる」という状況をフォーカスするという点で、ものの言い方が西日本（とくに関西圏）にみられる婉曲性・間接性と連続的であるように感じた。

もっとも、地理的連続性と即座に結論付けるには短絡的であるという見方もあろう。東京であっても山の手エリアと下町エリアが異なる言語体系を有していたように、名古屋の階層性とものの言い方との関連性が強く起因していると考えるからだ。とはいえ、東京の山の手エリアで「綺麗になりますね」のようなことばがけが自然かというと、そうとも言えない。同じ階層であっても名古屋らしい・関西らしい配慮・丁寧さというのが確実に存在していると思わざるを得ない。

また、表現法的にみても面白い。「綺麗になる」という事態に言及する場合、その東京的言い方を思い浮かべると「綺麗にしてくれてありがとう」や「綺麗になりましたね」となるだろう。「綺麗にしてくれてありがとう」は話し手の「ありがたい」という主観にまで触れるものであり、「綺麗になりましたね」は時制（過去形の「た」）の明示による事態描写文により観察的視点が前面に出るため、やや高圧的にも受け取れる。このような場面では少し使いにくいかもしれない。一方、「綺麗になりますなも」は、掃除したあとの事態に言及しているのだから眼前の事態をフォーカスすることにはならない。眼前の事態をフォーカスしない表現は、当然、婉曲的・間接的性質を帯びてくる。

こうした言い方からは、「なも」「えも」に頼らずとも、内容（話題）や表現法自体から丁寧さ・上品さが浮かび上がってくるように感じる。「なも」「えも」形式が共通語化によって消滅したとしても、相手に何かを伝える際どこにフォーカスするかという表現の視点やものの言い方こそが「バリバリの名古屋弁」として脈々と受け継がれていくのかもしれないと思った。

五．よそよそしさと照れくささ

第二回目の聞き取り調査では、本プロジェクトの共同研究者である曽我幸代先生が名古屋方言話者として聞き手となり、名古屋方言に対するイメージや特徴について対話形式で話を伺った。第一回目の聞き取りでは名古屋弁の婉曲性・間接性のもたらす丁寧さについて知ったが、婉曲性・間接性は丁寧さだけに発揮されているわけではなさそうだ。

聞き取りにおいて、名古屋弁は目上の人に対しては控えてしまうところがあるうえ、会話に主語があまり登場しないという特徴が挙げられた。その理由として、「照れくさいというのはどうですか。なんとも言えん、よそよそしかったり、照れくさかったりという、やらしい根性がはっきりしんものになって」主語を要しないのではないかと分析なさっていた。

こうしたお話をお聞きしながら、聞き手として話を聞いていた参加者（愛知出身者）は、教師が生徒に対して「ちぃとえりゃあぞ」、「ちぃとえりゃにゃーか」というのを聞いて怖く感じたというエピソードも挙げていた。共通語（標準語）訳すると「ちょっと君は極端ではないか？（言い過ぎではないか？）」である。このような「だめ」とは怒らない間接的な言い方のもつ含みが怖さになるという点について伴野さんも同意なさっていた。言い方にもよるが、共通語（標準語）の感覚で聞くと非難・注意であることは理解できるもののそこまで怖い印象はもたない。間接的な表現に怖さを感じるのは、そうした言い方の文化圏であるからこそであろう。

六．今後の説話集録に向けて

こうした日常生活の些細なやりとりや言い回しは、録音資料等の記録に残さない限り、言語生活から消滅してしまう。言い換えれば、そのようなやりとりをしていたこ

と自体が記録されないまま、日常のちょっとした言い回しが消滅していってしまうこともあるのだろう。今回の聞き取り調査を通して、小さなことばのやりとりに関するエピソードは、円頓寺説話の一端を担っているだけでなく、言語資料としても大きな意味をもつと感じた。本報告においてはことばに焦点を当てていたが、ことば以外の円頓寺でのエピソードも多く集録している。今後も、様々な観点から話を伺っていきたい。

・加藤秀俊・寿岳章子・藤本義一・安田章生（一九六八）「関西弁の将来」『言語生活』二〇二号，筑摩書房
・芥子川律治（一九七一）『名古屋方言の研究』泰文堂
・芥子川律治（一九八三）「愛知県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学6　中部地方の方言』国書刊行会
・小林隆（二〇一七）「文献を利用した新しい方言研究―十返舎一九・谷崎潤一郎が見た関西人の言語行動―」『日本語学』三六巻九号
名古屋大都市圏研究会編（二〇一一）『新版図説名古屋圏』古今書院

聞き取り風景（2019/6/6、「きもの工藝ヲジマヤ」店内にて）

円頓寺商店街入口

「掘川七橋」の一つである五条橋。
現在の橋は 1983 年にコンクリートで復元された。